

古着の山を宝の山に

新品やまだ着ることのできる衣服が廃棄されるファッションロス(衣服ロス)が新たな環境問題になっている。大量の温室効果ガスの排出につながっているとされ、民間では業界を超えて廃棄を減らす取り組みが広がる。(山下真範)

ワクチン

2月上旬 千葉県木更津市の再利用業者の倉庫には、茶色い回収袋が約1500個も山積みになっていた。袋の中身は約7万5000着分の古着などで、重さは約30ト。カンボジアやモンゴルなどに輸出され、現地で販売される。

これは再利用業者の日本リユースシステム(東京)などが手がける回収サービス「古着deワクチン」で集められたものだ。このサービスでは、利用者が3300円を支払って古着を回収してもらい代わりに、1回当たり5人分のポリオワクチンがNPO法人「世界の子どもにワクチンを日本委員会」(東京)を通じて

「ファッションロス」対策

輸出や染め直し 廃棄防ぐ



倉庫に山積みとなっている古着入りの茶色い回収袋(2月8日、千葉県木更津市)＝日本リユースシステム提供

10年には年間432トだった古着の輸出量は、20年には10倍の4320トに上った。日本リユースシステム(東京)の広報担当者は「愛着のある服を安価で売るよりは、ワクチンを通じて身近な社会貢献をしたいという利用者が多い」と話す。

再利用ブランド

アパレルメーカーも再利用に力を入れる。若者向けの「グローバル

アイク」などのブランドで知られるアパレル大手の「エストリア(東京)」は昨年

10月から、販売が終了した古着や古着を黒く染めて再利用したブランドを展開する。黒染めに汚れなどを消せる上、色の出方の違いで個性も生まれる。廃棄される衣服に新たな価値をつけることで無駄を減らすこと

17年から店舗などで顧客から古着を回収し、ポリエステル

定という。

ジェット

アパレル以外の繊維製品も再利用する取り組みは広がっており、回収量は年々増加している。日本航空は広がり

国内線の定期便で、これは一度回社

サービスが始まった20

組みたが、同社の